

風土



哲学堂にて

神蔵

器

四 聖堂・六賢台や花風吹く

一 と呼吸一つの花の葱坊主

四 書館は絶対城や春惜しむ

笛子鳴く筆塚文塚離れゐて

初蝶の三尺飛んでかがやけり

蛇出でて希望が丘に丈のばす
たましひのあしたに涼し孔子かな
全山の花の真中に「仁と礼」
あたたかや釈迦尊像の担になひの掌て
吹き上げし落花そのまま滝となす
東京に四月八日の初雪ぞ
縁有りや縁無しとして業平忌



竹間集

同人作品



春日傘

相沢有理子

長靴は春泥まみれ獣医来ぬ
馬柵越しにはねる仔馬を呼び寄せぬ
菓膳に足りし穂の芽高雄山
河津桜咲きそめ朝の園静か
みじろがぬベンチの老女春日傘
道真忌愛でし菜の花ふんだんに
地震過ぎて雪あはあはと鯉浮きぬ

犬ふぐり

小林輝子

堅雪野往きつ戻りつ犬と子と
逃がすなと怒鳴られて追ふ野焼かな
犬ふぐり羽あるものの影重ね
ただ祈る三月十日十一日
水神のほとりぎしぎし駒返る
骨の色の流木に乗る春の鴨
犬を曳くつもりが曳かれ霾晦

春は名のみ

田村すゝむ

春雪の隙間を走る郵便夫
回廊の僧の摺り足春の雪
梅咲くや小田原城の鳥瞰図
一日一句生きる証の二月尽
春は名のみ砂を泣かせる日本海
春や春銀座金春こんばる通りかな
内孫の男四人の卒業期

春の月

塩田杉郎

(博久改メ)

啓蟄や庭のホースにねぢれ癪
消防署に高き天井つばくらめ
遅るるを常のバス停のどけしや
薔薇の芽や園入り口にキユーピッド
録音機担ぐ男や百千鳥
満天の星のさざめき春の闇
客待ちのタクシー濡らす春の月

春の雪

田中佐知子

花種買ふ遠山は雪残りぬて
笹漬の小鯛も若狭春の雪
カクテルのアレキサンダー春の雪
坐禅草人影淡く重なりぬ
雪解けて背伸びしている坐禅草
蜷の道この世の風のやはらかに
春愁の人無く廻る木馬かな

雪解

工藤ミネ子

諸もろの神にも雪解村外れ
一心に食む白鳥の帰心かな
残雪の水引く如し翁棲む
春の市子に押され来る車椅子
着流しのごと鳥海山に雪残る
花の種まう蒔いてゐる母の里
かたくりの花ごと無人販売所

春寒し

柴田久子

種を蒔く雲多き日は雲背負ひ
きのふより今日新しき春動く
囀のリズムに口語文語あり
遺言の封されてより雛納め
ドアノブに静電走る戻り寒
凹ませて見たき青空風船突く
春寒し放射線科は地下二階

花日和

高村 令子

鶯 や 俄 に 湧 き し 旅 心
降 り 立 て ば 春 日 平 ら に 山 の 駅
自 づ か ら 光 る 力 や 芽 木 の 山
芽 吹 く 山 力 溜 め て は 雲 袖 ぐ
た だ 歩 く こ と が り ハ ビ リ 山 笑 ふ
道 路 鏡 の 中 へ 奥 へ と 芽 木 の 徑
菜 の 花 の 風 に 包 ま れ 祠 神
手 浸 せ ば 五 感 さ ざ め く 春 の 水
賜 は り し も の に 余 生 や 花 日 和
生 き る こ と 死 ぬ こ と 忘 る 花 の 下

山河集

同人作品



神蔵
器選

梅白し妻の机に世界地図
生田 作

遮断機の降りて昇つて山笑ふ
城松の亀甲に雨あたたか
濡れてすぐ乾く沓脱地虫出づ
木々の芽や息整ふる磴半ば

涅槃西風絆創膏の指立てて
生田恵美子

大鯉の水の反転霧ぐもり
干し傘を畳むやこつと蝶生まる
難流し分水嶺を近くして
靴先の雲雀さへづる野へ向けり

冬困解く南天の朱のままに
森屋 慶基

雪間草花輪を立てる杭を突く
無言にも阿吽母との春炬燵

日の匂ひ振舞ふやうに囁れり
ひさかたに墓に雪なき彼岸かな

錠剤に記号番号亀鳴けり
鈴木 庸子

もう一度髪なでつけて難流す
植木屋の梯子あづかる日永かな
生薬の小粒のにがき余寒かな
一つとも見える三つ石磯遊び

友禅の彩を撫でゆく春の川
西村 雪園

円山は桜満開とたれか言ふ
ありがたや観音堂の山桜
風光る三十六峰右に見て
風光る指折り十(とお)の寺巡り

◇特別作品◇(抄)

春を訪ねて

須藤美智子

階を登り初富士真正面
寺町に四辻多し山笑ふ
小京都と言はれし里や山笑ふ
浅春や名草の奥に巨石群
渡良瀬の細き流れや春の川
ぼんぼりの続く墨堤花の宴
スカイツリー近し桜の隅田川
夜桜やスカイツリーも桜色
外つ国の人も酔ひたる桜かな
五重塔裾を彩る桜かな

(名草は地名)

風土集



神蔵器選

巡り来て足助の道の土の雛
川崎 内藤 静

くれなゐのト半椿とふはこれ
影引きて落ちて行くなり白椿
啓蟄の米を盛りあげ地鎮祭
離陸機をいくつ見送り野に遊ぶ

読書坂の大学図書館亀の鳴く
横浜 下山田美江

食卓に文庫画帳や日の永し
階段を引きずり下ろす三鬼の忌
芝山を嬰のほふくや風光る

大理石の青き地球儀月おぼろ
二の鳥居三の鳥居や燕来る
東京 奥田 茶々

五万本の十字架の丘囀れる
サツカーの児の靴大き春の泥
右足を畳み忘れて春の墓
囀りや書斎に遺るゴルフ帽

たましひはみな上を向く花こぶし
京都 杉本葉子

夕さくら夫の電話の来るころか
摘蓄や桃の蓄を傘に受け
雛の部屋香ほのかなる人形町
逆境も順境もありてさくら咲く

初蝶や北鎌倉の駅を出づ
川崎 井口ふみ緒

水温む病院へ行く橋一つ
噛みしむるフランスパンや春の雷
卒業の母の涙の濃かりけり

囀やこどもの国を半周す
石仏の笑みに含羞春の風
佐倉 松崎 雨休

亡き友に文ことづけむ揚雲雀
「サンチョ・パンサ春の風車ぞ」佐倉郷
眼力に潤み鹿嶋の孕み鹿
酔臥とは甦る死や朧月

菜の花の蝶となりゆく嶋立庵 千葉 小林 共代

鳥声の俳諧道場三月尽

桜東風一期一会の嶋立庵

若草や像の虎女は十九歳

ゆく春の嶋立庵に五智如来

命名の「陽」の一字や桃の花 川崎

森田 節子

満身で泣ける赤子や百千鳥

蜆汁好き嫌ひなく児は育つ

花ミモザ婚ととのひし二人かな

すみれぐみたんぽぽぐみや野に遊ぶ

芽木の彩海へ押し出す瑞巖寺 盛岡

石崎 浄

石工来て音ふやしけり彼岸寺

佐保姫の袖の一振り疾風荒れ

不来方の天空一碧地虫出づ

地獄の名鬼の名抱き山笑ふ

ふるさとの春泥さへもなつかしき 秋田

本間 羊山

路味噌や一夜宿りのあつけなし

三月やチラシの裏の走り書き

露の臺川の向かうに手の会釈

山笑ふ首を廻せば鳴るこけし

釈迦仏の在すやすらぎ木の芽寺 相模原

天野みゆき

頂上に水湧く不思議閑古鳥

羽繕ふことも習はし羽抜鶏
はつきりと白馬の形に雪残る
推敲の二転三転木菟鳴けり

清流に机を洗ひ卒業す

合流の片辺濁らす雪解かな

日脚伸ぶ大島結ぶ定期船

名を変へて笛吹川と藍に雪

三津五郎の楷書の芸や柳の芽

神在す島へきりなく春怒濤

かげろふの芯に崖なす龍見台

放哉の句を諳じて春の浜

強東風や白うさぎてふ波頭

沖へ向く船まだ児えて遠霞

帰かな先へ先へと鴨の首

児に蹤いて鳩の歩くよあたたかし

桃生けて蕾ひとつぶづつ拾ふ

夕東風の人のごとくに戸を叩く

啓蟄やぐらつく石に足を掛け

三月の田園日和画架の列

長閑さに探鳥会の里巡り

畦道へ喜色もたらず初音かな

谷戸の里つらつら椿つらつらに

藤枝 間島あきら

津山 生田 作

津山 生田恵美子

横浜 安永 圭子